

論文審査の要旨

多発性嚢胞腎(PKD)は嚢胞の増加増大に伴い進行性に腎機能が低下し腎不全に至る疾患であるが、嚢胞形成、進展に関与する因子はまだ十分に解明されておらず、これを解明するための研究である。研究目的、方法については適切であり、よくデザインされている。

クエン酸投与群ではDPT投与群に比し嚢胞の断面積は有意に小さく、また断面積の大きな嚢胞の数も少なかった。GFRはDPT投与群が最も低く、明らかにクエン酸投与群に比べて低下していた。CLC-KはDPT群でコントロールより発現が弱かったが、クエン酸群はDPT群より発現が強かった。尿細管上皮細胞でCLC-Kはクエン酸群でDPT群より強く染色され、嚢胞の増大に伴いCLC-Kの染色性は弱くなっていた。

このようにクエン酸により嚢胞形成の著明な抑制がみられており、その治療効果は明白である。クエン酸は、実験的嚢胞形成ラットにおいて嚢胞形成を阻害し腎機能悪化を抑制した。尿細管上皮細胞でのCLC-Kの発現や局在の違いが、嚢胞増大に関与していることが証明され、臨床症例の治療を考えるうえで非常に有用である。

30

氏名(生年月日)	武 田 直 人
本 籍	
学位の種類	博士(医学)
学位授与の番号	乙第2400号
学位授与の日付	平成18年9月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	A new simple therapeutic method for chronic subdural hematoma without irrigation and drainage (洗浄、ドレナージを行わない新しい慢性硬膜下血腫の治療)
主論文公表誌	Acta Neurochirurgica 第148巻 第5号 541-546頁 2006年
論文審査委員	(主査) 教授 堀 智勝 (副査) 教授 岩田 誠, 黒澤 博身

論文内容の要旨

〔目的〕

洗浄、ドレナージを行わない新しい慢性硬膜下血腫の治療方法を開発したので報告する。この方法は従来の手術室で行う穿頭洗浄術よりも侵襲が少ない簡便な方法である。

〔対象および方法〕

1994年5月から2002年10月の間に東京都保健医療公社大久保病院(旧都立大久保病院)で治療を行った慢性硬膜下血腫の患者70名(78患側)を対象とした。診断はCTまたはMRIで行い、特に治療対象患者を選別はしなかった。手術はベッドサイドで局所麻酔下に行い、静脈麻酔は使用しなかった。頭頂結節から経皮的に、直径2mm程度の穿頭をドリルで行い、内筒、外筒一体となった針を挿入する。その後内筒を抜きエクステンションチューブを接続し圧を測定する。血腫は酸素と10mlづつ置換していく。置換後ドレナージなどは置かず終了とする。

〔結果〕

術後70名すべての患者において神経学的に完全な回復が認められた。術中、術後に手術合併症などはなかった。吸引血腫量は5~280mlの範囲で、平均は96.1mlであった。血腫初圧は0~200mmH₂Oで、平均92.1mmH₂Oであった。再発は7名(10%)、7側(9.0%)に認められた。入院期間は平均5.8日と短く、52%の患者は3日以内

に退院している。

〔考察〕

本手術手技は経皮的な穿刺にもかかわらず安全に施行され、出血などの合併症を起こさなかった。その要因の一つとして、コッドマンのデプスチェックドリルを用いた穿刺により、不用意な過挿入や、硬膜の鈍的剝離に伴う硬膜外血腫などの出血性合併症を防いだことが挙げられる。生理食塩水で血腫を洗い流す従来の手術方法と違い、酸素と血腫を完全に置換する本手術手技の特徴は、血腫量や圧などを測定できることにある。それらを含め既往歴、症状、嗜好、CT所見などの因子から関連する事象を考察した。

血腫量が多いほど血腫初圧が高かった。麻痺、意識障害、頭痛は高い血腫圧と関係があった。再発との関係では、CT上 high あるいは iso density の症例は再発しやすかった。従来再発しやすいといわれていた、CT所見で分けられるセパレートタイプ（ニボータタイプ）は再発が少なく、糖尿病、痙攣の既往、血腫の厚さなどの因子には関連性が見出せなかった。従来の手術方法での再発率は9.8%との報告があるが、本方法は10%（患側でみると9.0%）であり同等の成績であった。

〔結論〕

慢性硬膜下血腫の治療において本手術方法は、従来の方法と同程度の治療成績をもちながら、低侵襲で入院期間も少ない等の特徴を有する。

論文審査の要旨

慢性硬膜下血腫の患者70名（78患側）を対象とした。手術はベッドサイドで局所麻酔下に行った。経皮的に直径2mm程度の穿頭をドリルで行い、内筒を抜いた後、圧を測定する。血腫は酸素と10mlずつ置換していく。置換後ドレナージなどは置かず終了とする。術後70名すべての患者において神経学的に完全な回復が認められた。術中、術後に手術合併症などはなかった。再発は7名（10%）、7側（9.0%）に認められた。入院期間は平均5.8日と短く、52%の患者は3日以内に退院している。

本手術手技は経皮的な穿刺にもかかわらず安全に施行され、出血などの合併症を起こさなかった。慢性硬膜下血腫の治療において本手術方法は、従来の方法と同程度の治療成績をもちながら、低侵襲で入院期間も少ない等の特徴を有する。

31

氏名(生年月日)	サクラ 櫻 庭 一 子
本 籍	
学位の種類	博士(医学)
学位授与の番号	乙第2401号
学位授与の日付	平成18年9月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	Down-regulated PAR-2 is associated in part with interrupted melanosome transfer in pigmented basal cell epithelioma (PAR-2発現低下は基底細胞上皮腫におけるメラニン顆粒転送障害に関与している)
主論文公表誌	Pigment Cell Research 第17巻 371-378頁 2004年
論文審査委員	(主査) 教授 川島 眞 (副査) 教授 小林 楨雄, 松岡 雅人